明治百年

越中から富山へ (1)

富山県は、もと越中国とよばれた地域である。今年は明治百年にあたるが、百年前の越中国が富山県に変っていった当時をふり返ってみよう。

勤王か佐幕か迷う加賀藩

越中は加賀に右ならえ

その頃はもちろん富山県ではなく、わが郷土はすべて越中国であった。そして婦負郡全体（180ヵ村）と上新川郡の一部（73ヵ村）のみが富山藩の領土で、他はすべて加賀藩のものであった。富山藩は、本家である加賀藩のやり方にすべて右ならえしていたので、明治維新の際の越中の動向といっても、加賀藩の動向がそのまま越中の動向であったわけである。

幕府は倒れない？

さて、加賀藩はわが国での大藩であるので、これを維持温存するために、歴代藩主も、家臣も、幕府のごきげんをうかがい、幕府ににらまれないようにさまざまな苦心をはらって、長州、薩摩、土佐、水戸に勤王党が活発に動いても、加賀藩では事なかれ主義、日和見主義をとり、全体としては佐幕に傾いていた。それには藩主斉泰の夫人が将軍家斉の姫であったことも一因となっている。当時においては、二百数十年にわたって統いた徳川幕府が倒れて、天皇政府ができようとは、一部の先覚者をのぞいては、一般人士には夢にも思われないことであったから、加賀藩が佐幕的であったのも当然であろう。

慶寧と勤王党

もっとも、例外はあった。藩主斉泰の世子＝慶寧および少数の勤王党がそれである。しかしそれは微々たる勢力で、とうてい藩の大勢を動かすことはできなかった。

慶寧はもとより勤王の志あつく、文久3年（明治元年より5年前、以下同様）6月、江戸に上って幕政に参与せよという幕命を拒み、朝廷の命を奉じ、宮廷を守護しようとして手兵をひきいて上京した。慶寧は長州に好意をもち、当時苦境にあった長州のために一肌ぬいで、尊王攘夷派と公武合体派との調整につとめた。しかしその効なく蛤御門の変となり、長州は大敗北した。この時慶寧は事件の渦中に入ることを避けて近江国に退いていたが、この行動は反幕府的であるとて責められ、慶寧は謹慎を命ぜられ、彼に従った勤王派諸士はことごとく処刑された。ここにおいて加賀藩のわずかの勤王党は一掃され、藩論は佐幕一辺倒となった。

汚名ばん回のチャンス

つづいて幕府は第一回の長州征伐をおこしたが、加賀藩は汚名ばん回のチャンスとばかりに幕府に従軍を願い出て、4千人の大部隊を広島に向けて出征させた。やがて長州は戦火をまじえずに降伏し、加賀藩部隊もひきあげた。慶応元年（3年前）4月、慶寧はやっと罪を許され、翌2年（2年前）4月には藩主斉泰が隠居し、慶寧が第14代藩主となった。

慶応4年（明治元年）1月、京都は風雲急を告げ、幕府は加賀藩に出兵を命じた。慶寧は直ちにこれに応じ、藩兵を上京させた。慶寧の志はもとより勤王にあったが、倒幕は欲するところでなく、薩長が幼帝を擁してほしいままなる行動に出ることをにくんだのである。

忠義の誓書も不発＝薩長の冷遇

日和見主義たたる

しかし、鳥羽伏見の戦において幕府側が大敗し、天下の大勢は決した。錦旗を奉じた薩長政府にはもう抵抗できない。慶寧は直ちに軍隊をひきもどし、前非を悔い、「これより朝廷のために粉骨砕身して忠義をつくさん」との誓書をたてまつった。

その後は薩長政府の指令のままに、越後長岡戦争、会津戦争に大軍を送り、名誉ばん回にけんめいに戦った。しかし幾度かの変節がたたって、維新後の加賀藩の人士は冷遇され、日のあたる場所に登用されなかった。

富山県の誕生は明治16年であるが、その以前に、封建社会が崩壊して近代社会が生れるために、このような混迷と苦悩がくりかえされたのである。

次号につづく。

（県史編さん室）

明治初年における苦難（その1）

越中から富山へ ②

先号には明治維新開幕に際しての、加賀藩の混迷と苦悩についてのべた。
今回は当時の人民の苦難についてのべてみたい

ツキのなかった加賀藩

右せんか 左せんか

歴史を後になって批判することはたやすい。しかし歴史的重大事局の渦中にあるものにとっては、右せんか左せんかを決するのは大きな難事である。維新の動乱に際して、加賀藩が薩長につくか、幕府につくかは、関が原合戦において東軍につくか西軍につくかと同じ程度の難問題だったであろう。いや、それよりもっとむずかしかった。関が原の時点においては、徳川の前途は旭日昇天の勢いであり、豊臣勢の斜陽化は誰の目にも明らかであったからである。

だから、明治維新の際に、加賀藩が後手々々とまわり、維新後は、日のあたらない道を歩かなければならなかったことを、後になって責めることはできないと思う。要するにツイテいなかったのである。

期待はずれの理想社会

明治維新が「御一新」とよばれた言葉のうらには、「万悪の根元である封建制度」がくずれたら、すぐにも幸福な社会、理想社会が出現するであろうという期待があった。しかし、それは幻滅に終った。なぜならば、幕府はたおれたものの、ひきつづき越後、東北に、あるいは北海道にはげしい戦争がおこり、人民もそれに動員され、戦火をうける。ひきつづき凶作・飢饉がおこり、暴動、百姓一揆がおこる。法律制度は文字通り朝令暮改で、目まぐるしくかわる。役人の不馴れと行き過ぎと、短日月の間の交替等々……。「万悪の根元である資本主義」が崩壊したら、すぐにも理想社会ができると思うのは大間違いで、ソ連が安定するのに五十年かかり、中共は革命後二十年をへた今日、いまだ動揺混乱をつづけているのである。

長岡、会津攻略の基地に

さて越中の人民は、維新の際にいかなる苦難をなめたか。次にその主なものを少しあげてみよう。

明治元年の四月から九月まで、北越戦争（長岡城攻略）や会津戦争があり、越中人（藩士・農民とも）が多く動員され、戦死者が少なくなかった。従軍した農民はすべて物資輸送の役夫に使われたものである。長岡城の戦いは激戦で、官軍が占領したのを奪回されたこともある。この戦いの様子は司馬遼太郎の小説「峠」に詳細にでてくるところである。

このように、越後で大規模な軍事行動がとられたので、隣接の越中は兵站基地として重要な役割を果した。

越中からは多数の軍需物資や役夫が徴発・徴集され、また戦地へゆく兵隊の休泊基地となった。砺波地方では、わらじや空き俵の供出を命ぜられた記録が、石動町や福野町に残っている。わらじなどは石動駅や福野駅にあつめられ、小矢部川によって伏木に運ばれ、海路越後へと送られた。

弾薬、衣服などは金沢から石動まで陸送し、そこから川舟で伏木へ運ばれた。軍の兵糧として、領内各地の御蔵米が使用された。出陣と帰還の兵士の食事や宿泊、荷物運搬の一部は道筋の宿駅や付近の農村の立替えとなった。

立山町塚越にある忠次郎の碑

大凶作でパンドリ騒動

明治二年は大凶作で、農民は租税の減免を願い出たがゆるされず、中新川・下新川には「パンドリ騒動」という大規模な百姓一揆がおこった。参加人員はのべ一万人をこえ、襲撃された十村役人や豪農の家は六十戸に及び、死者は六人に上った。首謀者は中新川郡塚越村（旧利田村・現在立山町）の忠次郎で、明治四年十月に斬罪に処せられた。この忠次郎の石碑が立山町塚越に立てられている。氷見地方にも騒動があって、首謀者は牢死した。

次号につづく。

（県史編さん室）

明治初年における苦難（その2）

越中から富山へ ③

先号には明治二年の新川郡のバンドリ大騒動を述べたが、凶作に困窮するのは農民だけではなかった。

餓死寸前の町民を救う

服部嘉十郎、大橋与三市らの英断

都市の貧民はもっと困窮して飢に泣いた。高岡町にあっては、昨二年の窮状は三年に入ってことに甚だしく、時の役人服部嘉十郎、大橋与三市らは、救助米を施すために、富家の等差に従って寄付金を出さしめ、一方では藩用金三百貫余を借り、なお町蔵に収容されている給人米千百二十五石を放出して、毎日男に四合、女に三合の米を施し、一人も餓死者を出さなかった。これはまことに思いきった非常手段で、その英断は永く市民にほめたたえられた。施米量は二千二百石余、今のお金になおせば約四千万円となる。これを寄付金と藩庁下付金で折半して出すことになった。

砺波の地租改正騒動

明治十年二月には西郷隆盛が九州に挙兵し、天下を驚かせたが、この年、この月、越中にも大事件がおこった。これより先、地租改正の税率が減額されたが、その減額分が地主の得となるのか小作人の得となるのかについて意見が対立し、不穏の空気がみなぎった。

そこで石川県大書記官、熊野九郎は、役人を随えて砺波地方に出張し諭告してまわった。ところが、二月七日戸出村永安寺において諭告中、小作人等は大声をあげて会場に乱入、役人らは命からがら夜どおし金沢へ逃げ帰った。金沢からは歩兵一個小隊が出動して、ようやく鎮撫することができた。主謀者は裁判にかけられ、徴役七年が一人、五年が一人、罰金七十五銭が一人の処分をうけた。

神仏分離令で釣鐘や仏具も供出

明治元年三月、維新政府はいちはやく神仏分離令を出したが、これは「神社と仏寺を習合している所は分離せよ」と命じたもので、仏教を排斥したり、寺院をつぶしたりせよと命じたものではない。しかし全国各地に拡大解釈がおこなわれ、仏教弾圧、排仏毀釈の暴挙がおこった。富山藩の大惨事、林太仲もその一人で、明治三年閏十月に合寺令を出し、藩内各宗寺院を統合し、一宗派に一寺院のみ残し、他の寺はすべて廃寺とした。神仏混合の旧習を打破し、富国強兵のためには多くの寺は無用の長物であるとした。釣り鐘や仏具などの金物を富山城二ノ丸、侍番所へ集積し、柳町正龍寺に鋳造場を設け、大砲や鉄砲を作る計画であった。僧侶たちは泣く泣く堂宇をこわし、仏具を供出した。

しかしその行き過ぎが中央でも問題となり、明治五年十月には新川県から寺院復元令が発せられ、各寺院はおおむね維新前の隆盛に復することとなった。

僧侶たちは神官に

これと前後して、立山の芦峅寺、岩峅寺の数十人の僧侶たちも、髪をのばして神官となり、雄山神社一本に奉仕することになった。

二上山の養老寺も射水神社と分離し、射水神社は二上村から高岡城址へ移った。能登の石動山天平寺も廃止され、伊須流伎比古神社一本となった。

一方維新政府は、神道と仏教とを統合して、天皇政治を翼賛させようと計画し、東京に大教院、地方に中教院を建て、天照皇太神を主神に祀った。富山市の中教院はその名残りである。

明治初年には、四民平等・人材登用・教育の普及・殖産興業・文明開化・自由民権など、輝かしい事がらが多々あるのはいうまでもない。

しかしこれらは従来いろいろな機会に紹介されており、広く知れわたっている。したがって、その事がらを書かず、人民の苦難の面を述べた。われらの父祖は、かかる苦難のかずかずを克服して、今日の大富山県を築いたのであった。

次号につづく

（県史編さん室）

写真は神仏分離のなごりをとどめる閻魔像（芦峅寺）

富山県の誕生

明治初年における苦難

越中から富山へ（最終回）

明治9年，富山県の前身，新川県は再び石川県に併合された。行政はすべて金沢中心で，県会はいつも意見が分かれ，荒れた。越中人の不満は高まり，分県運動のため越中の先覚者たちの東奔西走が始まる。時に明治16年5月，富山県が歴史に登場する日がきた。

「版籍奉還」と「廃藩置県」

富山県は、明治十六年五月九日に石川県から分離し独立したが、この日に至るまでにはいろいろな迂余曲折があった。次の表がそれを示す。この表について少し説明しょう。

明治二年の改革は、形から見れば、加賀藩が金沢藩にかわっただけであり、富山藩には何の変化もない。けれども内容は大いにちがう。この時に「版籍奉還」がおこなわれたのである。

朝廷のものとなり、あずかり物となったのである。

次の明治四年七月の改革は「廃藩置県」である。藩を廃して県を置き、旧藩主の知藩事に辞表を出さしめ、新しい人材を選んで県令（今の県知事）に任じた。この時金沢藩主前田慶寧も、富山藩主前田利同も、家族と共に東京へ移住し、富山県民との永年の伝統的主従関係はここに完全にたちきられた。かわって新進気鋭の人材による、明治御一新にふさわしい革新県政が展開されることになる。

富山県となるまで

区分		寛永16年6月20日	明治2年6月17日	明治4年7月14日	明治4年11月20日	明治5年9月25日	明治9年4月18日	明治16年5月9日
加賀国		大聖寺藩	金沢藩	金沢県	金沢県	石川県	石川県	石川県
能登国		加賀藩			七尾県			
越中国	射水郡				新川県	新川県		富山県
	砺波郡							
	新川郡							
	婦負郡	富山藩	富山藩	富山県				

富山県の前身、新川県

明治四年十一月には、砺波・婦負・新川の三郡で新川県が構成され、県庁は魚津に置かれた。そして射水郡（氷見をふくむ）は能登と合わせて七尾県となった。射水郡が能登にくっつくというのは変な話で、きわめて不自然である。果して、一年もたたぬ明治五年九月には、射水郡が能登から分離して新川県に加わり、越中一円が新川県となり、県庁も富山にもどされた。今の富山県と同じである。このまま続けば問題はなかったが、明治九年四月には新川県が廃止され石川県に合併されてしまった。

分県運動おこる

大活躍の米沢紋三郎、入江直友

さあ困ったことになった。第一に県庁が遠くなる。今のように汽車・自動車・電話のある時代とはちがう。越中には急流暴河が多く、治水築堤費を多くほしがるのに、加能ではそれを不要とし、道路建設費を多く要求する。金沢は旧百万石の城下として、加賀人は昔の権威を笠にしていばり、越中人を圧迫する。その他いろいろ不都合なことが多かったので、越中人民は分県を望んでやまない。

ついに明治十五年夏、越中国の町村有志代表五十余名が富山町に会同して、分県請願の決議をし、政府に対する建白書を認めた。そして米沢紋三郎を委員長、入江直友を副委員長として、直ちに上京させ、当時の内務卿山田顕義に建白書を手交し、また別に三条実美・岩倉具視の元老に面接して、分県を請願した。

「由来富山県はその面積は広く、人口が多く、米栗は余るほどあり、その他の物産もまた少なからず。加えるに、伏木港の良港を有し、一県として独立するのに何らの不足もない。しかるに明治九年四月十八日以来石川県に属し、県庁は遠くなり、人民の利害は相反することが多く、その不幸は実に大なるものがある。ぜひ分県をゆるしていただきたい」と熱誠こめて請願したので、遂に太政官はその願意を容れ、明治十六年五月九日付け太政官布告をもって、富山県の創設を許したのである。

この間の苦労はなみ大ていでなくはるばる上京したものの、政府要人はなかなか面会してくれず、二週間近くの間、毎朝役所へ日参してがんばったという。道州制の叫ばれる今日、かえりみて感慨深いものがある。

おわり

（県史編さん室）